

---

# 姿は微細な風と在り

Novel Factory

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

姿は微細な風と在り

### 【Nコード】

N3318V

### 【作者名】

Novel Factory

### 【あらすじ】

The Beansの応募者全員サービス・「プチThe Beans」掲載の『この手が、指が。』とは違ったバージョンの玄武と汐姫の物語。

他のサイトでも掲載しています。

「玄武、様……」  
汐が呼んだ。我の名を。

それは一ヶ月前に遡る。

狐の子、大陰陽師・安倍清明の占いに介入者があった。  
女、だった。

娘を救って欲しい、と彼女は清明に頼み込んだ。  
何度も。何度も。

そうして遣わされたのが清明の式神、十二神将の玄武と太陰だった。

指定された小さな屋敷には、盲目で、見鬼の幼い女の子がいて。  
彼女が、度々妖に襲われるという。

そしてそれを “水神様” が守ってくれるのだと。

襲撃時に居合わせた十二神将のリトル二人は、討伐したが、玄武には蟠りを覚える。というのも、屋敷にはそもそも異様な水気が渦巻いていて、妖からも何故か水気を感じ取ったからである。

結果、玄武は白虎、朱雀と “水神様” とやらを退治することに成功。

女の子は視力を取り戻し、その代わり見鬼の才を失って、十二神将や妖を認識出来なくなったのであった。

その時、玄武は初めて自らに攻撃能力を持たないことを悔いた。別に、水鏡で遠方にいる者同士の通信の手助けをしたり、水壁などの防御能力を持つているのが嫌な訳ではない。攻撃能力に比べたら、そっちの方がいい。

でも、こういう時は。

こういう時だけは……………。

他の神將の力を借りるのではなく、自分の力で。

もしまた何かあった時、防御しているだけでは……………だから……………。

女の子　　汐の、突然の呼びかけに、回想モードだった玄武は現実に引き戻された。

まだ、我のことを覚えていたのだな。

だが、彼女はこちらを見ていない。気付くことが出来ない。それは、見鬼の才が、もはや彼女にはないから。

ただただ記憶を探っている、といった感じだった。

縁側に出てきた汐姫と、玄武の距離はわずか2、3メートル。

それでも。彼女が気付くことはまずない。

その刹那、強めの風が吹いた。

玄武の漆黒の衣は僅かに棚引いただけだったが、一方汐姫の方は

髪を巻き上げられ、目を開けられずにただひたすら風に翻弄されていた。

汐姫が一步後退る。

が、床はぎりぎりのところで絶え、身体がぐらついた拍子にバランスを完全に崩して、踏み外した。

「太陰の風に比べたらマシなものだ」などと暢気に考えていた玄武の顔が、さあつと青ざめる。

あ、と小さく声を上げて、神足を使つて駆け寄った。

支えるつもりでいたのだが、結果的に玄武は下敷き状態になってしまう。

なんだか　　ちよつとどころかカツコ悪い。

「あれ・・・どうしてかな？痛く・・・ない」  
地面から、浮いていた。

下に、何かがある（いる）。

「水の、匂い・・・」

汐姫の手に、不可視の何かが触れた。

長い、布。

触ったことがある。

覚えがある。

この布は。

この、水の匂いは。

「玄武様、ですか」

「・・・・・・」

立ち上がつて退けながら、彼女はその名を紡いだ。また。

疑問の体をとっていないながら、それは間違いなく断定形だった。

玄武は、それを察して面食らった。

仕方なく玄武は顕現する。常人にも見えるほど神気を強めて。

「貴方・・・が、玄武様・・・？」

「・・・そうだ、汐よ」

「・・・・・・」　　ところであの、かの日以来汐の元に来て下さらな

かったので心配しておりました」

「いや、我はしばしば来ていたのだ。だが、汐が我を感じられなくなっただけなのだ」

そうですね、と思い当たるところがあつたのか、汐姫は何度も頷いた。

それもそうだろう。寝て、翌日いきなり何も”見え”なくなっていれば。

汐姫は、あの時のようにまた玄武の顔に触れた。  
確かめるように。

玄武もその意図が分かっているから、かつてのように頬を染めつつも、抵抗はしなかった。

「玄武様、どうしたのですか……？お顔が」

「顔……？」

「もしかして、嫌でしたか……？」

「な、にを……？」

「え……と、汐が見えないから、見えるようにして下さったのでしょう？それで、気を……」

申し訳なさそうに汐姫は俯いた。

「否。そうではない」

玄武の言葉に、汐姫は安堵の息を漏らす。

言われて、初めて気付いた。

顔が、何故か辛そうに歪んでいる。

折角、こうしてまた話せる日が来たのに。

「……………から、だろうか」

「……………？」

闘将であればよかったのにと、先程までずっと考えていたからだろうか。

そうすれば、たくさんのものを守れるのに、と。

取り敢えず、努めて表情を平生の無表情に戻した。  
「……………何でもない」

「やっぱり……………汐の言った通りでしょう？」

今度は汐姫が言葉足らずの意味不明な言葉を発した。

何が、と隣に腰掛けている汐姫の顔を窺おうと頭を傾ける。

「……………玄武様は、お優しいお顔をしていると」

言って、玄武に微笑みを向ける。

玄武は照れて内心ハトが豆鉄砲を食らったように狼狽し、それを悟られぬように沈黙を保ったまま空を仰いだ。

確かに闘将であれば、とは思っけど。

たくさんのものを守れたら、とも思っけど。

でも、今は。

たくさんではないけれど、大切な少しが。

かつて、自らの意志ではないのに視力を代償として見鬼の才を得ていた、この幼き姫が。

彼女の笑顔が                    守れたことを。

それが少なくとも自分の働きがあつてのことだと。

彼女の前でだけは……………自惚れてもいいのかもしれない。

**（後書き）**

感想、評価等よろしくお願いします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3318v/>

---

姿は微細な風と在り

2011年7月31日03時28分発行